

林業経済研究所創立 70 周年記念企画 リレーインタビュー①

私の研究史〈熊崎 実〉

聞き手：江原 誠*、石崎涼子**、早船真智**

日 時：2016 年 9 月 15 日

場 所：自宅

1. 経歴とこれまでの研究の変遷

◇生い立ち

1935 年 12 月 11 日に岐阜県福岡町（現在の岐阜県中津川市福岡）で生まれた。実家は祖父の時代に製材工場と農業を営んでいた。山も多少所有していた。当時、勉強は嫌いではなかったが、自分の好きな勉強に偏ってはいたと思う。実家の蔵には親父や叔父たちが読んだと思われる書物があって、中学生の頃から戦前に出版された『改造』（改造社）などにもよく目を通していた。

大学は、実家から近く試験日程のタイミングも良かった三重大学農学部林学科に進学し、森林経理学を専攻した。林学科を選択した理由としては、山間部で育ったため生活の中で身近に山があったことが大きかったと思う。

◇研究者としてのスタート：ドイツとの比較で日本を見る（22 歳）

学部を卒業した 1958 年に国家公務員上級試験の林学職に合格し、林業試験場（現、森林総合研究所）に配属された。当時、大学では公務員試験を受ける人が多かった。試験では論文が高く評価されて合格したと聞いている。合格後、営林署などの行政ではなく林業試験場に採用されたことで研究者としての道を歩むことになった。

最初に配属された営農林牧野研究室では、一応経営関係の研究をすることになっていたが、まず語学の勉強から始めよということで、ドイツ語の専門書を読まされた。当時の林業試験場の図書館にはドイツから送られてくる林業雑誌が 2、3 種類あったと思う。これを読むのが楽しかった。雑誌を通じて知った当時のドイツの林業界は安価な外材流入の煽りを受け、不振を極めていた。アメリカの南部では短伐期の育成林業が台頭し始めており、ドイツでも短伐期でいくか、それとも 80～100 年といった長伐期の経営方針を維持するかについて、論議されていたように思う（最終的には長伐期を守ることになった）。こうしたドイツの状況を見て、日本もいずれドイツのような事態に陥るのではないかと懸念していたのだが、世界の動きの中で外から日本の林業を見るという習性はこの時から身についた。

研究らしきものに取りかかったのは、採用後 2、3 年経ってからである。この頃 1960 年世界農林業センサスが行われ、私は紙野伸二さんたちとその分析に携わった。センサス分析は、その後も継続して取り組んだテーマの 1 つである。当時の日本の林業界は、上述のドイツの状況と対極だった。木材価格は上昇基調が続き、国有林の経営も順調だっ

* 森林総合研究所 国際連携・気候変動研究拠点

** 森林総合研究所 林業経営・政策研究領域

主な経歴

年	経歴
1935	岐阜県福岡町に生まれる
1954	三重大学農学部林学科入学
1958	三重大学農学部卒業 林野庁採用、林業試験場配属、経営部経営科 営農林牧野研究室
1961	東北支場 経営部 経営第2研究室
1964	経営部経営科 経営研究室
1976	調査部海外林業調査科 技術情報室長
1978	農学博士（京都大学、論文博士） 経営部経営第1科 経済研究室長 調査部海外林業調査科研究協力室 併任
1979	林学賞（日本林学会）
1983	経営部経営第1科長
1988	林業経営部長
1989	筑波大学農林学系教授
2001	岐阜県立森林文化アカデミー学長
2007	日本木質ペレット協会会長
2015	日本木質バイオマスエネルギー協会会長

た。高度経済成長期に入り木材需要が増えると、国有林が伐採の対象となり、天然林伐採、道路の敷設や造林事業が進められた。増大する需要圧を背景に、長伐期施業の天然林から成長の早い針葉樹林へ転換する方針が採られた。私が林業試験場に採用された時期はちょうどその方針が確立した頃であり、当時の日本ではドイツ林学が痛烈に批判されていた。

◇東北支場時代：現場巡りを通じて学ぶ（26～29歳）

3年後に東北支場（現、東北支所）へ異動となった。ここで印象に残っているのは岩手大学の船越昭治さんらと一緒に地域林業の研究に取り組んだことである。岩手県の調査費で県内の森林組合のほとんどを調査して回った。この経験は現場を知る上で非常に役立った。現場でインタビューした相手の多くは、森林組合の役職員や森林所有者である。私は研究者の言うことはあまり信用しないが、現場でビジネスに携わっている人たちの話はしっかり聞くべきだと考えている。論理ではなく、山を実際に経営している方々の考え方を知ることが重要だ。

◇一橋大学経済研究所：実証的な経済分析（20歳代後半）

東北にいた時から経済学をさらに勉強したいと思っていた。そこで、一橋大学経済研究所に1年間の国内留学をした。お目当ては大川一司教授で、近代経済学をベースにした農業の経済分析や動態分析に惹かれたのである。国民経済の発展とともに、林業・林産業はどのような展開をたどるのか、それが私の一貫したテーマになった。

一橋大学経済研究所は、普通の大学の研究室と違い、ほとんどが研究員で研究会が中心だった。様々な研究会に参加して多くの人々と知り合ううちに、大川教授や篠原三代平教授が行っていた長期経済統計プロジェクトの中で、林業分野のデータ分析を担当すること

になった。このプロジェクトに関わっていたため、1年間の国内留学終了後も続く長い付き合い合いとなった。一橋大学での研究成果は、主要部分が梅村又次編（1966）『長期経済統計第9巻 農林業』（東洋経済新報社）に収録され、詳細は熊崎（1967）「林業発展の量的側面—林業産出高の計測と分析（1879～1963）」（『林業試験場研究報告』）にまとめた。これらは、経済発展につれて林業がどう推移するかを所得や生産量、価格の関係を見て実証的かつ定量的に分析したものである。

その後、計量経済学にも一時期関心をもったが、経済は単純な数式で動くものではないことを思い知らされて早々とやめてしまった。

◇水源林の応益分担に関する調査研究（30歳代後半～）

その後日本でも森林の環境問題が取り上げられるようになり、水源林の応益分担問題が大きなテーマとなった。この時期は、日本の林業を取り巻く状況が悪化して森林を健全な形に維持するのが難しくなっていたのに対して、水の使用量は今より多く、水不足が深刻な問題となっていた。関東地方の上流域（特に群馬県）では森林整備の必要性が認識され始め、他方で下流の東京都では「伐採が進んだため水が濁った」、「流れが不安定になった」というような苦情が出始めていた。これらの苦情に対し群馬県側からは、「今までどれだけ苦労して森林を守っていたかを下流側は認識できていないのではないか」という批判が出ていた。このような背景から、水源林の整備や管理に関わる費用の一部を、その水を使っている下流の住民にも負担してもらうべきだという話になり、林野庁の調査事業が始まった。この調査を引き受けたのが水利科学研究所で、所長の武藤博忠さんから経済学の観点から応益分担について検討してほしいとの依頼を受け、結局5年以上もこの研究に取り組むこととなった。調査しているうちに、上下流の人々が協力して水源を守った歴史的な事例が各地にあることが分かり、現場に向いて調べるのも楽しかった。費用分担問題の経済理論的な整理は、やや抽象的なレベルのものだが、これをもとにして博士論文を書いた。

博士論文の主査は京都大学の岸根卓郎教授で、副査には半田良一教授にも加わってもらった。研究成果は、熊崎（1974）「森林利用計画に関する研究 第1報」および熊崎（1975）「同 第2報」（いずれも『林業試験場研究報告』）にまとめ、熊崎（1977）『森林の利用と環境保全』（日本林業技術協会）として出版した。これらは、一橋大学で学んだことや他の環境経済学の研究者と論議しながら考えたこと、自分で勉強してたり着いた考え方などをまとめたものである。

◇熱帯林研究に着手（30歳代後半～）

1976年に林業試験場の調査部海外林業調査科内に熱帯林関連の調査を担当する技術情報室が新設され、室長として配属された。当時、熱帯諸国からの木材の大量輸入に対して、これに批判的なナショナリズムが輸出国の側でも生まれ始めていた。この部署では、熱帯林に関する文献資料等を収集・整理し、資源量の把握や相手国への対応策の検討を主に行った。

この頃から国際協力事業団（現、国際協力機構、JICA）のプロジェクトが熱帯諸国の各所で始まり、海外林業調査科はJICAプロジェクトの支援も担当した。最初のプロジェクトは、フィリピンのパンタバンガンを対象として行われた。このプロジェクトは、火入れ後に土壌が固くなった熱帯独特の環境での植林プロジェクトであり、担当された皆さんは本当に苦労しておられた。短期専門家としての私の任務は土地の所有関係を調べることであった。中央政府のレベルでは森林は全て国有林ということになっているが、現場には

慣習的な支配権のようなものがあり、二重構造となっていた。中央政府はプロジェクト実施地は国有林であり植林しても問題ないと言うが、実際には地方政府から耕作許可を得てその土地を耕作しに来ている人も多くいた。その後国際協力の仕事で海外に出向く機会が増え、下手な英語でコミュニケーションに苦労することが多かったが、得るところも多く、今ではこのような機会をいただいたことに感謝している。

◇森林総合研究所時代の研究の集大成（50歳代前半）

林業試験場および森林総合研究所での研究の集大成として、熊崎（1985）『転換期の林業経営―長伐期林業への道』（林業科学技術振興所）および熊崎（1989）『林業経営読本』（日本林業調査会）をとりまとめて出版した。森林という複雑な生態系と市場経済を対象とする林業経営は、数値や方程式を用いた理論だけでは説明できない。複雑かつ不確定な要素が多くなる場合、林業経営に対する経営者のものの考え方や将来についての見方が重要な要素となる。『林業経営読本』は、そうした観点から林業試験場および森林総合研究所での30年間の研究を締めくくる意味で執筆した。これには林野庁に対する批判も一部入っている。これ以上の批判は、森林総合研究所においては立場上許されなかった。1989年に森林総合研究所を退職して筑波大学に移ると森林総合研究所時代よりも自由に発言するようになったと思う。

私がいた当時の森林総合研究所は、1人で自由に研究させてくれる時間と予算のゆとりがあり、恵まれていたと感じている。例えば、研究者は1つのテーマについて数週間山にこもってデータ収集に時間を費やすことができたり、実験室に寝泊まりして試験を続けられたりといった研究スタイルで思う存分に続けられた。

◇筑波大学時代：翻訳書の出版に力を注ぐ（50歳代半ば～60歳代半ば）

筑波大学に移ってからは、自由な時間が増えたせいか、洋書の翻訳を多く手がけた。初めて翻訳した本はジャック・ウェストビー著・熊崎訳（1990）『森と人間の歴史』（築地書館）である。原著者と面識があったわけではなく、この本を見て関心をもち自発的に翻訳した。当時のウェストビーは、国連世界食糧機関（FAO）に勤めており林業関係の非常に重要な位置にあったが、体制派ではなくて批判的な視点で物事を見ていた。この本に惹かれたのは、私に新しい視点を与えてくれたからである。それまでは焼畑農業を営む農民は森林破壊の元凶だと言われ方をしていたが、彼はむしろその農民側の立場から、一番悪いのは役人だと書いている。ウェストビーのこうした考え方は、今ではごく一般化していて新鮮味はあまり感じられないが、当時はかなりのショックを受けた。それと同時に、研究者に必要なのはこうした誠実さだということを感じたのである。

築地書館から出版された翻訳本の中で比較的売れたのは、ピーター・トーマス著・熊崎・須藤・浅川訳（2001）『樹木学』とコンラッド・タットマン著・熊崎訳（1998）『日本人はどのように森をつくってきたのか』である。前者は、内容が広範な専門領域にわたり1人では訳せないため、森林総合研究所の大先輩である須藤彰司氏や浅川澄彦氏にも翻訳を依頼した。後者は、私が書店で見つけて筑波大学の学生と一緒に訳した日本の森林史の本である。タットマンが凄いのは、世界的な視野で日本の特徴を浮かびあがらせることに成功した点である。この分野の日本の専門家は、タットマンの研究成果は日本人による研究業績の二番煎じだと言うが、国際的な視野を欠いていたのでは、日本の林政史なり林業史のユニークさは本当の意味で分からないと思う。日本の歴史研究は、個々の時代や専門領域ごとに細分化されており、細かい部分は詳しく分かっているが、日本の森林史の大きな流れをどう捉えるかといった視点は不十分であった。

筑波大学にいた頃は、日本林学会（現、日本森林学会）の副会長（1998年4月～2000年3月）も務めたが、退官してまもなくに学会からも身を引いてしまった。学会が本来果たすべき役割を十分に果たしていないと思ったからである。林政学にしても林野庁の施策の解説ばかりで、批判的な視点が欠けている。私が林業経済研究者に一番言いたいのは、長い物に巻かれず、世界全体の流れの中でのものごとを見て、日本が改めるべき点のはっきりと言わないといけない、ということである。

◇岐阜県立森林文化アカデミー以降（60歳代半ば～現在）

筑波大学を退職してすぐに岐阜県立森林文化アカデミーの設立準備に携わった。私は岐阜の東濃地方の山間部に長男として生まれたものだから、故郷を捨てたという後ろめたさがある。もう一度岐阜県に帰ってきて奉公しろと言われて断れなかったのである。2001年の開学と同時に初代学長に就任し、2007年に日本木質ペレット協会の初代会長に就任するまでご奉公することになった。そうこうしているうちに2012年からは固定価格買取制度（FIT）が発足し、今度は新設された日本木質バイオマスエネルギー協会を背負うこととなり、現在に至っている。

2. 研究における基本的なスタンス

◇研究スタイル

研究者でありながら、学会との関わりはきわめて薄い。研究集会などに頼まれて講演をすることはあるが、学会での研究発表や学会誌への投稿は、この2、30年来、皆無というくらい。おそらく学術論文の本数などを気にする必要がなくなったからであろう。それよりも、自分の考えを広く世間に伝えて、反応を確かめるほうがずっと重要である。学会誌というのは、当然のことながら読者層が研究者中心で、いくら書いても反響が少ない。林業関係の雑誌で比較的読者層が広いのは『山林』（大日本山林会）である。この雑誌へはかなりの頻度で投稿してきた。林業経済学会の皆さんも意見発表の場をもっと広げべきだと思う。

私のささやかな経験をお話しよう。『世界』（岩波書店）のような総合雑誌からその時々林政・林業問題について意見を求められて、何度か投稿したことがある。驚いたことに、これが時の大蔵大臣や農林水産大臣の目に留まり、問い合わせがきたり、呼び出されたりすることもあった。なぜそんなことになったかと言えば、林野庁の説明、ないしは世間一般の常識とは多少違った主張を展開していたからである。林業関係の専門誌に投稿していたのではこのようなことはまず起こらない。また比較的新しいところでは、『環境ビジネスオンライン』（日本ビジネス出版）というウェブ週刊誌で「これからの木質エネルギービジネス」というコラムを担当し、2013年8月～16年7月にかけて合計60回連載した。このコラムの執筆を通して痛感したのは、インターネットという媒体の凄さである。いろんな人たちが読んでくれていて、反応も実に多様である。これからはこうした情報媒体をうまく使うことが必要だろう。

私に残された時間はもう長くはないが、できることならもう一冊まとまった本を書きたいと思っている。1958年に林業試験場に入ってから今日までの約60年間、日本の森林・林業行政を第三者の立場でずっと観察してきた。その観察記録は雑誌記事や報告書の形で相当数残されており、これらをもとに過去の記憶を呼び戻しながら、60年史をまとめてみたい。本のテーマは日本の林業がなぜこれほどまでに落ちぶれてしまったかを明らかにし、併せて（できることなら）再建の道筋を示すことである。

◇影響を受けた人

森林総合研究所時代に特段の師弟関係を築いたことはなく、筑波大学で教えた学生には研究者になっている人があまりいない。私は子分も親分もつくらず、ある意味「一匹狼」として生きてきた。

前に触れたように、一橋大学の大川一司教授の影響はたしかに大きかった。ただしその影響は大川著（1955）『農業の経済分析』（大明堂）や大川著（1954）『農業の動態分析』（如水書房）などの著書を通してであり、弟子になったわけではない。当時の林政学者のほとんどはマルクス経済学系で、彼らの論議に私は辟易としていたものだから、大川氏の著作が飛び切り新鮮に思えたのであろう。

直接接しているいろいろと教えてもらったのはイギリス人のピーター・ブランドン氏である。氏は元々東京大学の研究生として来日していたが、私が筑波大学にいた90年代に3年間筑波大学へ来てもらった。ブランドン氏は、林学と金融経済学の両方を修めていて、林業経済学に新しい息吹を吹き込んでくれたように思う。例えば、林業経営は市場メカニズムの下で行ったほうが比較的間違えが少ない（合理的期待形成の理論）、政府機関が介入したからといって決して最善の解は出てこない（国が100年先の将来を見通すことはできない）というスタンスがそれである。こうした考え方は、ブランドン著・熊崎訳（1996年）『イギリス人から見た日本林業』（築地書館）に展開されているが、私にとってのインパクトは大きかった。

3. 林業経済研究に携わる者へのメッセージ

◇林業経済研究への期待

『林業経営読本』のあとがきに書いたことだが、私の念頭にあったのは、歴史的な比較を縦系とし、国際的な比較を横系とする織物の中に現在の日本林業を位置付け、これからの進路を探ることであった。実はこのスタンスは、一橋大学の長期経済統計プロジェクトで貫かれていたものであり、今にして思うと、それが無意識のうちに染みついていたのかもしれない。いずれにしても、現在の日本だけを見ていて、将来を展望するのは非常に難しい。ただ、歴史の流れを縦系、国際比較を横系とする織物は規模が大きく、短期間で織り上げるわけにはいかないが、若いうちからその材料をこつこつと積み重ねる努力は続けてほしいと思う。

私の脳裏にある「織物」に現在の日本の林業を据えて見ると、残念なことがいっぱい浮かびあがってくる。これほどの森林資源に恵まれながら、それを十分に利用できていない。この半世紀ほどのあいだに木材の生産量を日本ほど大きく落とした先進国はほかにないだろう。歴史的に見ても、明治維新以降木材の生産量はおおむね上昇傾向をたどっていたが、1970年代以降下降に転じて回復の兆しがなかなか見えない。なぜそうなったかを明らかにすることが、大事な林業経済研究のテーマだと思う。

特に中山間地域を元気にする必要がある。これからは、化石燃料の使用が制約を受けるだろう。そうした中、多面的機能をもつ森林の使われ方が歴史的な転換期に差しかかっている。日本の森林危機は何度かあったが、その度に日本は立て直してきた。藩の林政問題も秋田の杉や木曽の檜にしても、一度皆伐をやって失敗したが立て直した。明治政権で新しい体制をつくった。第二次大戦後の大きな混乱期からも立ち直った。私たちは先人が守ってきた資源を守れる体制をつくっていかねばならず、林業経済研究はこれに大いに貢献できると思っている。

◇中堅・若手研究者へのメッセージ

これからあなた方が何を訴えていこうとするのかを問いたい。ものを書くときは、インパクトがあるものでなければ、あまり意味がないように思う。インパクトがある論文を書くためには、今世界がどう動いているかに常に気を配り、事実関係をしっかり押さえていくことが重要である。若手研究者が書く論文の中には、見方がフレッシュで高く評価できるものもある。しかし、研究の世界では「論理がない」として研究論文としては評価しないという風潮も少なからず残っている。私はそういう風潮が若い人の伸びる芽を摘んでしまっている。一番良くないことは、1つの理論が先にあって、それに固執して論文を書こうとすることである（博士論文は、理屈をつけないと通らないから仕方ないが）。特に環境問題は、理論にこだわると現実が見えなくなるので、理論は捨てるくらいの姿勢で現実に飛び込んで問題を考えるといい。

研究職は息長く続けられる商売である。世の中が変われば研究テーマも当然変わってくる。私の場合、林野庁の附属研究機関に籍をおいていた関係で、大きなテーマはいつも上から与えられていた。しかしそれを不満に思ったことは一度もない。新しいテーマには未知の世界に入れるという魅力があるし、自分のもっている研究手法やツールを生かせそうな研究領域が必ず見つかる。幸いなことに昔の林業試験場では研究テーマや手法の多少の変更は許されていた。ただし上部機関の方針に抗うような研究結果や結論を公表すると、徹底的にたたかれる。非難の矛先が問題の研究者個人ではなく、組織の長に向けられるから始末が悪い。とはいえ国から給料をもらっている以上、これも致し方ないことであろう。

自由に発言できるようになるのは、やはり組織を離れてからである。今の私などは、怖いものがなくなって、かなり自由に発言している。若い皆さんにもリタイアの時期がいずれ訪れる。平均寿命が延びているものだから、その後が結構長い。研究でも十分ひと仕事できる。私のような在宅研究者からすれば、インターネットを介して世界中の情報が簡単に入手できるようになったのは大助かりだ。現役の皆さんは授業や会議がいっぱい詰まっいて、インターネットでの丹念な検索がなかなかできないと思う。

私の専門領域であるエネルギー政策に関して言えば、この分野では技術進歩のスピードが速い。各国のエネルギー政策にも大きな変化が生じるのは当然のことだ。こうした世界の動きが日本の皆さんにはあまり伝えられていない。2000年代の初めから固定価格買取制度（FIT）を採用してきた欧州の国々では、風力や太陽光による発電のコストが大幅に低下したためにFITの店じまいが始まっている。その中で木質バイオマス発電は大変な苦境に立たされているのだが、日本はどこ吹く風で、バイオマスでも高い買取価格が維持されていて、大型の発電所が続々とつくられようとしている。私にはこれが不安でならない。老骨に鞭打ってでも、海外の情報をより早く正確に伝えなければならないと考えている。

FITの情報があまり伝わってこないのは、ドイツが主要な発信元であるからだ。ネットを検索すれば英語のサイトも多少見つかるが、詳しい情報のほとんどはドイツ語で書かれている。ドイツ語の読める専門家が昔よりも減っているのではないか。私の場合は、たまたま以前の林業試験場でドイツ語の専門書を無理やり読まされ、それが今になって役に立った形だが、スペイン語や中国語なども多少勉強していたら、ウェブ上での世界めぐりはもっと面白くなっていただくと、時々思うのである。欧州に行くと3、4カ国語を操る研究者がいくらでもいる。日本の研究者は言葉の面で圧倒的なハンディを背負っていると言わなければならない。

残された道はそれぞれが得意分野を分担して補い合うことだろう。近年になって、海外

調査の結果をまとめた書物がいくつか出版されている。特に得るところが多かったのは、森林総合研究所の人たちが中心になってまとめた森林総合研究所編（2010）『中国の森林・林業・木材産業』（日本林業調査会）と岡裕泰・石崎涼子編（2015）『森林経営をめぐる組織イノベーション』（広報ブレイス）だ。インターネットで得た情報と現場を歩いて得た情報とでは、臨場感がまるで違う。はっきりした目的意識をもって海外の状況を調査し、それをもとに国内向けの提言を積極的にやってもらいたい。

それを少しでもお助けしようと、速水林業の速水亨氏と計らって2016年の1月に「林業イノベーション研究会」を立ち上げた。若い研究者になるべく多く参加してもらおうべく、事務局を森林総合研究所において、石崎涼子さんや平野悠一郎さんに世話してもらっている。これまで2、3カ月に一度の頻度で研究会を開いてきた。

私は今年82歳になるが、研究会での論議を通して皆さんからたくさんのエネルギーをもらっている。また相も変わらず下手なテニスを週3のペースで続け、体調もそれほど悪くない。何もしなければ、筋肉が落ち、頭がぼけて棺桶へ一直線ということになるだろう。運動の大切さを痛感する今日この頃である。

※執筆者による編集は語尾表現や話の順序、文献情報などの最小限にとどめており、用いた表現は基本的に先生の言葉をそのまま再現している。

（文責：江原 誠・石崎涼子）